

(1) 食べ物をきちんと処理する

畑で余った野菜や取り残した果実は、そのままにせず取り去る。

また、お墓のお供え物^{そな もの}も、そのままにせず持ち帰る。
キャンプに行った時など、余った食材やお菓子は持ち帰る。



食べ物を残しておくことはエサを与えているのと同じで、野生動物が一度味を覚えると、それを追いかけてどんどんわたしたちの住んでいる所に近づいてきます。家から出る毎日の生ゴミなどもきちんと処理して、野生動物を引き寄せないようにしなければなりません。

(2) 野生動物に食べ物を与えない・見せない（特にサル）

ハイキングに行った時など、食べ物を与えたり見せたりしない。



野生動物は、「人慣れ^{ひとな}」させてはいけません。
人間が食べている物を覚え、食べ物を見たとおそってくることもあります。

(3) サルの「追払い^{おいはら}」を行う（子どもだけでは行わない！）

サルがやって来ている地域では、「追払い」を行う。



サルが本来のすみかにもどるよう、大きな音を出したり犬を使ったりして「追払い」を行い、人間はこわいということを教えなければなりません。ただし、逆におそってくることもあるため、大人といっしょに追い払うなど十分な注意が必要です。

なお、クマは、「追払い」を行ってはいけません。見つけたら、あわてずにそっと立ち去ることが必要です。

(4) 野生動物がすむ所と人間が住む所を区分する

山など野生動物がすむ所とわたしたちが住む所との境界^{きょうがい}を、草を刈るなど見晴らしが良くなるよう整備して、区分する。



野生動物は臆病^{おくびょう}で警戒心^{けいかいしん}が強いため、見つけた時にすぐにかくれる場所がないと、なかなか近づくことができません。

境界の整備のほか、畑や果樹園では、周囲^{まわ}を柵^{さく}などで囲んで野生動物が入ってこれなくするような取組みも行われています。

(5) 野生動物のすみかを整備する

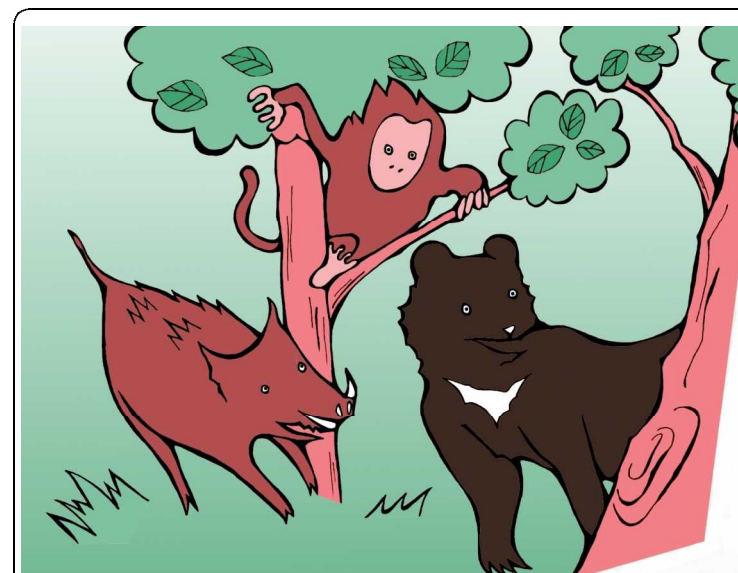
本来の野生動物のすみかである山などを整備する。



山にエサが豊富であることなど、本来のすみかの環境が良ければ、野生動物はわたしたちの住んでいる所まで来なくともすみます。

森林整備など野生動物がもどるべき本来のすみかの環境を整えることが必要です。

野生動物について考えよう



本来山にすむサル、イノシシ、クマなどの野生動物が里に下りて来て、わたしたちのすぐ近くまでせまっています。

県北地方では、人間がおそわれる被害はあまりありませんが、田んぼや畑にやって来た野生動物が農作物を食べるなどの被害が深刻^{しんこく}で、農家の人たちは大変困っています。

被害を少なくするため、野

生動物のことをよく知り、また、人間と野生動物がお互いに困らないように生きていくにはどうしたら良いのかを考えてみましょう！

1 野生動物って？

サル（ニホンザル）

体長は、オトナで50cmから60cm（体重10kg～16kg）ぐらい
福島市（北部～西部）・桑折町・国見町・伊達市（北部～東部）などにすんでいる

十数頭から百頭ぐらいの群れで生活するが、オスは群れをはなれて単独で行動することがある

生活の範囲^{はんい}が広がり、サルの数も増えてきている

県北地方にいるサル： 約40群^{ぐん}・約2,000頭
（平成20年までに確認できている数）

昼間に木の上や地上で活動する

学習能力が高い

すぐに人間に慣れ、エサの場所を覚えるのも早い

他県では、サルがエサをさがしに民家に入ってきたり、観光客がおそわれる被害なども発生している

雑食性で、果実・種子・葉・芽・昆虫その他小動物などを食べる

県北地方では、ももなど果実の被害が特に大きい



福島県県北地方振興局地域連携室
（野生動物との共生に関する研究会）

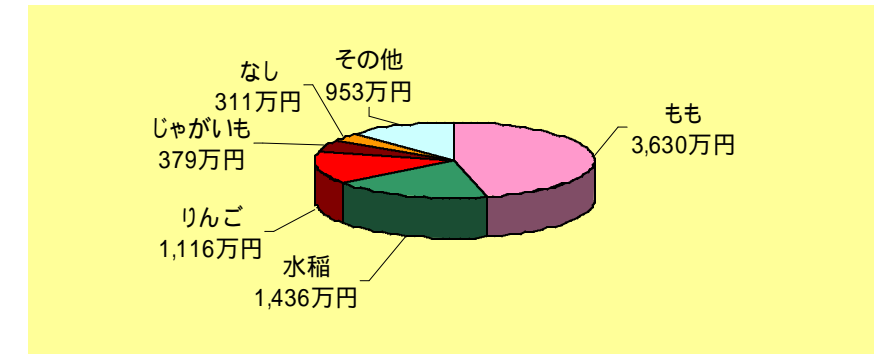
2 県北地方における農作物被害は？

(1) 被害の状況

県北地方の野生動物による農作物の被害額は約8,000万円（平成17年10月～18年9月 福島県調べ）と大変大きな金額であり、中でもサルやクマによる果樹への被害が飛び抜けて多く、次いでイノシシによる稲や野菜などへの被害が多くなっています。

調査の方法によっては、被害額はもっともっと大きいとも言われています。

【作物別の被害額内訳】



（平成17年10月～18年9月 福島県調べ）

(2) 被害が大きくなっている主な原因

野生動物が人間の住んでいる所に近づきやすくなっていることや人間が野生動物を引き寄せていることなどが、被害拡大の原因と考えられています。

野生動物がすむ環境の変化

山の近くに住む人間が少なくなり野生動物が里に下りやすくなっていること
本来のすみかである山の中などにエサが足りなくなっていること
果実などの取り残しで野生動物を引き寄せていること など

野生動物の「人慣れ」の進行

ハイキングなどで山奥に入った人間を野生動物が見る機会が増えていること
「かわいい」「少しぐらい」と考え、気軽にエサを与えていること など

狩猟者の減少

狩りをする人が少なくなり、野生動物が人間をおそれなくなっていること

3 お互いが困らないようにして生きていくためには？

県北地方では、野生動物による被害は今のところ農作物が中心ですが、今後人間が被害にあうことも考えられます。

お互いが困らないようにして生きていくには、野生動物をむやみに増やさないことも一つの方法ですが、本来のすみかにもどすなど人間との「すみ分け」を図っていくことも必要であり、そのため様々な取組みが行われています。

「すみ分け」に向けては、農家など現在被害にあっている人たちだけではなく、町に住んでいる人たちも協力して取り組んでいくことが重要です。

次の取組み例を参考に、みなさんとしては何ができるのか考えてみましょう。

イノシシ（ニホンイノシシ）

体長は、オトナで80cmから160cm（体重50kg～150kg）ぐらい

あぶくま
阿武隈山系を中心に福島市（東部）・伊達市・川俣町・二本松市（東部）
や本宮市（中部）など広い地域にすんでいる

単独で生活するが、出産のときメスが数頭集まって行動することもある

おくびよう
臆病 なため夜間に活動することが多い（鼻でにおいをかいで活動）

雑食性で、地表から地中までいろいろな植物や動物を鼻やキバで掘り返して食べる

いわき市では、植物園などのしばふや花だんがイノシシに掘り返される被害も発生している

はんしよくりよく
繁殖力 が強いため、今後イノシシの数が ばくはつてき
に増えるとも言われている

通常1年に1回、平均4頭から5頭を出産する



クマ（ツキノワグマ）

体長は、オトナで120cmから145cm（体重50kg～120kg）ぐらい
（ヒグマ（体長200cm～230cm）に比べると小さい）

おうう
奥羽山系を中心に福島市（北部～西部）・二本松市（西部）・本宮市・
大玉村などにすんでいるが、近年はあぶくま
阿武隈山系にもすむようになっている

伊達市や川俣町などでの 目撃情報もある

母子以外は単独で生活する

12月から4月ごろまでは、大木の穴、岩穴、土穴などで冬眠する

目はあまり良くないが、においをかく力は強い

運動能力が高い

走ること、木に登ることや泳ぐこともできる

雑食性で、芽・木の実・昆虫その他小動物などを食べる

ハチミツも好きで、ハチの巣をねらって民家の近くまでやって来ることもある

ペンキなどのにおいにも反応し、遊んでいるうちに新しいカンパンやテーブルなどをこわしてしまうこともある



ここでは、野生動物のうち、県北地方で農作物への被害を特に多く発生させているサル、イノシシ、クマについて紹介しました。

このほかにも、ハクビシン、タヌキ、ネズミ類、スズメ、ヒヨドリ、カラス類、カモ類などによる農作物被害も見られます。